

## 子ども理解を深めるために

毎日出会う子どもたち。気持ちを通じ合う嬉しさは、格別のものがありますね。でも、どうしてそんなことするのか、と子どもの気持ちが見えないように思える時がありませんか。そんな時には、どんなふうに関わったらいいのか迷ってしまい、子どもを受け容れることが難しいような気持ちになってしまうかも知れません。子どものことがわかると、その言葉や行動の意味が腑に落ちて、子どもを受け入れ、味方になりやすくなったり、具体的な声かけや、ほめたり、叱ったりといった関わりを、より上手にできるのではないかと思います。様々な姿を見せる子どもたちをどう理解していくか、「京のせんせい知恵袋」からヒントになることを紹介しましょう。

### ○子どもを理解するために

#### ステップ1「ノンバーバルな情報に注目しましょう」

子どもの話す言葉は、子どもを理解する重要な手がかりになります。「面白そう」、「やだなあ」といった子どもの声を、つぶやきのような小さな声も含めて聞き取りたいものです。それとともに、言葉以上に雄弁に子どものことを語ってくれるのが、ノンバーバル（非言語的）な情報です。心の距離が近ければ、子どもは教員のそばに寄ってきますし、話しかけてくる頻度も多くなります。

元気がなさそうと思って、「どうしたの？」と尋ねたら、言葉では「大丈夫」と言っているけど、こちらの眼を見ず、うつむき加減で答えていたり、声が小さかったら、大丈夫ではない可能性が高いと思います。そんな時は、こちらに心配かけまいとしているのかもしれないし、自分でまずはなんとかしたい、と思っているかもしれないので、「元気ないじゃない」などと決めつけたりせずに、「そう」と受け取っておくのもいいかもしれません。視線を合わせてくるか、目を合わせないようにしているか、体はこわばっていないか、声の調子はどうか、どんな表情を見せやすいかなど、子どもが身体全体で示す表現に注目してみましょう。更に、子どもの気持ちを理解するために、子どものふるまいをまねしながら、その時に感じる気持ちを味わってみることもいいかもしれません。



#### ステップ2「リフレーミングしてみましょう」

教員は、子どものことを、様々な情報を手掛かりに、その人なりの視点から見ています。物を壊したり、命令するように他の子に話しかけたりしている、といった

出来事から、その子は乱暴な子であると考えられる場合もあるでしょう。そうした理解は誤りではないと思いますが、そういう風に理解すると、なんとなく、その子と距離が生じてしまいそうです。ある理解が、子どもとの関係を損ないかねない可能性があるとき、少し、視点を変えた理解をしてみることをお勧めします。例えば、ここに挙げた子どもの味方になるという視点で理解しようとするれば、エネルギーのある子、たくましい子、そのエネルギーを上手に制御しきれていない子、とみることができないでしょうか。そうすると、大きなエネルギーを持った可能性のある子、という視点や、その力をどう上手に表現させていけばいいのか、という指導の方向性が見えてくるかと思います。このように、理解の枠組み（フレーム）を別の視点から見直してみることを、リフレーミングといいます。

### ステップ3 「さまざまな解釈可能性を考えてみましょう」

人は好きな相手に対して、いつも好意的にのみ行動するものでしょうか。好きだからこそ、何も話さない、何とか関わりたいという思いはあっても上手に関われず、結果として意地悪ととらえられてしまうような行動をとってしまうこともあるかもしれません。また、好意の表現も、見つめる、話しかける、一緒にいたがる、何かに誘う、何らかのプレゼントをするなど、様々な表現をとる可能性があります。それが、すんなり、好意から出た行動と受け取られればいいのですが、一方的に働きかけられても困ると感じられることがあるかもしれません。うそをつくときも、誰かを困らせてやれという場合もあるかも知れませんが、誰かを喜ばせたい、ショックを与えたくない、秘密を守りたいといった、様々な事情が背後にある場合もありそうです。

心に響く指導となるためにも、その行動の背景にある、子どもの思いや事情について、様々な角度から解釈可能性を考えてみることに役立つかと思います。

### 子どもと和やかに過ごすためのプチメッセージ

教員が子どもを受け容れていなければ、子どもも教員に近づいてこないでしょう。和やかなひと時をともに過ごすことも難しいと思います。子どもの言葉や行動の意味を最初から一つに決めつけ、この子はこういう子とラベルを貼ってしまうと、それ以外のその子の姿が見えにくくなってしまいます。教員は、子どもが示す一つ一つの行動が持ち得る様々な可能性を考えながら、その子を理解していこうとする姿勢をもつことが大事だと思います。子どもを理解できた時、その子を自分の胸に収める（受容する）ことができると思います。

